

---

**どうやら俺は転生できるらしい。**

kakaze

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

どうやら俺は転生できるらしい。

### 【Zマーク】

Z1890Z

### 【作者名】

kakaze

### 【あらすじ】

俺はいつも通り過ごしていて、たまたま早く起きただけだったんだがな。いつの間にかに転生とかな…夢じゃないとかりえんだが、現実だ。

初投稿で文法「こちやんこちやん」です。あまり文才がないので嫌な人は来ないほうがいいです。それでもいい人は、生暖かい目で読んでいただけだと思います。

## いきなりの転生（前書き）

初投稿です。生暖かく見守ってもらえたなら嬉しいです。  
感想、アドバイスなどをもらえれば幸いです。

## これなりの転生

俺の名前は風霧進かざきりすすむだ。高校生だ。ただ、顔面が酷い。そのせいで学校でいじめを受けている。まあいつものことさ。バスで学校に通っている。現在もバス待ちだ。俺はいつもより少し早くに学校に行こうとしていた。いつもはもっと遅いが今日は早く起きてしまった。「今日も天氣がいいなあ……」バスがやっときた。何故か俺の体に……え？

……なんだこりは。なんか密室っぽいが……ん？目の前によく見ると変な奴がいる。男っぽいが、何かが違うな。

????「変な奴とは失礼な……一応神だぞ？」

うわ……心読んできた……

神「当たり前だ神だもの。」

ふむ神とな……これは……転生フラグ！！

神「まあそつしてやるが……いい加減心で話すのやめる。」

進「何故に？」

神「面倒だ」

進「……おく」

神「そうこうやお前の名前聞いていないな。」

進「ああそうだな…俺の名前は風霧進だ。」

なんか厨二病っぽいとかね…いや何でもない

神「そうか…じゃあ進お前自分が死んでいるのは分かつていいな?」

進「は?死んでたの?俺?夢じゃないの?」

こりやたまげたな…

神「ハア…だから神って言つても驚かないのか…」

進「まじか…今まで夢かと思つてふざけていたのに…」

神「まあ落ち着けその、なんだ、うん何か俺がね、人の姿でバス運転してたらさ、ハンドル操作間違えてね…正直すまんかった。」

進「…まああそこでの生活はあまり楽しくなかつたからいいかな。」

いじめとかいじめとか…

神「悲しいな…とつあえず転生させてやる。」

上から目線かわらずか。なんだかなあ…

進「んでどこの?」

はつきり言つて結構気になる。

神「ん~とだな...」「なんかどうだ?」

ペラペラ...

紙使うのか。もっとテレパシーみたいなかんじかと思つたのに。どれど~え~と 多種族あり 魔物あり ギルドなどもあり。などなどetc...

進「アバウトすぎないか?」

本当にetcしか書いてないんだよな...

神「調べんのがめんどうだつたんだ」

ヒツモシングル!過ぎる...

進「う~んといひで... チート能力ありか? 神よ。」

ふふつオンライン小説でもよくあることだからなあ無こと困る...わけでもないがなあ...

進「ありだが... そういうものは普通にいちが言ひんじゃないのか。」

あれ?なんかあきれてる?

進「別にいいだらうぢやでも。」

神「チート能力は何にするんだ進。」

………… セウだ。

進「なんでも武器を出せるよ！」してくれば、「まて」なんだ？」

神「能力は一つのみだ。」

チツ

進「じゃあなんでも武器をだせ……なんでも出せるよ！」

神「なぜかえたし。」

進「まあいいから神のひろおおおーお心で許して。」

神「そつかよ。」

進「あとせなんでも出せる能力さ、9歳まで使えなくしてくれ。」

神「…分かった。記憶を残して転生だよな。」

進「あ、あと転生した後9年間記憶封印してくれ。」

神「面倒だなあ…」

進「頼む」

神「分かつたよ…」

ものわかりがいいね！

神「余計なお世話だ。」

なぜ読んだし

神「顔だ顔。」

なるほど

神「それじゃあ転生させの進。来世でもがんばれよ。」

進「ああ。じゃあな。」

神「ふう…疲れた…」

神「あ、いいわ…あ～あ…送つちまつたよ…」  
神の苦労は絶えない。

## こわなつの転生（後書き）

あまつりあつこ感想などを書かれたら少しむかしもせません。

12月15日神か主人公か分からんと言われたので、つけました。

## 9号... 15田（前書き）

2話です。

あまつよく書かていませんね。がんばります...

9年と5日

9年経つた。いや、正確には9年と5日だ。ある程度ここのことが分かつてきた。が、その前に今俺は大変な危機に遭遇している。  
…どうしてこうなった。orz

なるほど。この町はジャロールと言い、自分はそれなりの家に住んでいるのか…

記憶が戻つて良かった。あの神なんか適当だつたからな……えと今は……午前10時か遅いなつてえ？あれ？文字読めないと思つたら読めた。ああ9歳までの出来事や習つたことも憶えていたのか。理解。さて、自分はどんなスペックかね？

名前は、フィシー・オル・カン  
貴族のようなもの。  
まあいいかなんか貴族っぽいてか

運動するべきであります。

勉強  
読み書き抜群。

魔法 初級のワイトすらできない……てか魔法あんのかよ

これ  
は  
び  
み  
よ  
う  
だ

魔法使いたかつた。これしかもこの世界魔法の才で成績が決まるようだ。なのでここではつまり貴族みたいなの中でも落ちこぼれか旅に出るにはうつてつけだな。早く行きさえ

うーんまあがんばれ俺。

あとは人間関係か……

「うわっ」

つい口に出てしまつた。どうやらこの体相当モテるようだ。なにせ1日10回は告白をされている。しかし、付き合つた人はいないようだ。無口だったらしくそこを「カワイイ~」などとすりよつてくるらしい。ふふつなかなかやるな……しかし振る!!みんな振る!!女恐怖症の俺にそんなの押し付けられたらひとたまりも無い。振つてやるぜ! みなぎつてきたw

「なんですよ!」

- - - - - 現在 - - - - -

「うるせえな。

「いい加減に諦めろ!」

現状を整理しよう今俺は、告白を断つている……5日連続で……理由はこう 「どうしても付き合いたい」「運命の赤い糸よ!」などなどその他頭の痛くなる言葉。夕方になり、「明日も来るよ」と言う奴をうやつたく思いながら返答をしている。ここつはコース・ジャン・クドと叫びらしい。

貴族みたいなのだ。こんなのが同じ貴族みたいなもののが嫌過ぎる。この世界大丈夫か?

「ねえ聞いてるの？」

「あ？」

「どうやら現状整理の最中になんか言つてたみたいだ。

「今日はもう遅いから帰るけど、明日も来るからねーー！」

「ふう…今日も逃げ切ったか…危ないな…それにしても今日は早めに帰ったな…嫌な予感しかしねえ…」

9年…と5日（後書き）

会話があまり無いので短いです。すいません。

主人公が能力を忘れているのは、ある複線があると考えたり考えな  
かつたり…

見てくださつている皆さんありがとうございます。

感想、アドバイスがあればどしどし受け付けます。よろしくお願ひ  
します。

## 夢の中文（複数形）

誤字、脱字があつまいたら、報告してほしいです。

## 夢の中で

……あれ？俺あの後帰つて母と父に少しばかり叱られて……そういえば何故叱られたのだ？まあいい。んで飯食つて寝たはず……それなにこどうして高原にいるんだ？

「それはまだ」「うわっ」「驚くことでもなことだろ？」「

後ろに神がいた。少しばかり驚いた。

「扱いが酷いぞ進。いや、フイシー。」

「びつかにしてほしい。

「といひで名前がフイシーなのか？」

「知らなかつたのか？」

何だその顔は。

「はあ……まずフイシーが名前。オルがえーと……ミドルネームみたいなのだ。まあ実際にはお前の言つところの貴族の証みたいなやつだ。カンは名字。分かつたか？」

「なるほど分からん。」

「言つだけ無駄だな。お前の夢から覚めたら元に戻しある古びた本に「起動」と書いてくれそんなかにある程度のことが詰まっているだ。」

引き出しに入っている訳を出し入れしている……よし憶えた。

「あとお前の能力少しきラッターをかけさせてもらひたぞ。」

「まじか」

「そのことも本に入っているよく読めよ。」

メンドクサイなあ

「そろそろ帰る。お前現在ただもてるドリ息子つてとこだわ。しかももてるを捨てるから本当にただのドリ息子だ。何とか体鍛えたりして魔法でも何でもできるようにならないとまあこいぞ?」

「へーへー分かりましたよ。」

「じゅあな」

え? うん、#.....

「ふあああ

あのやうひ植ぬなめなどへがつやだな。かくと、訳を出しへを開けますかな。

おー……どうゆうひじだ。本に向かって「起動」と書いてみたらアイ  
〇シドなるものが出てきたぞ。デコレーションが酷いな。星とかい  
っぱいついてやがる。とりあえず剥がすか。  
……

電源のつけ方俺知らんかった…… o r n

## 夢の中 (後書き)

なかなか思うように進みません。

**説明……奴が来たー！（前書き）**

ずいぶん長くなつた気がします。

誤字ががあつたりしましたら、報告よろしくお願いします。

説明……奴が来たーー！

……「ヤフウウウウウウ……電源はーーたあああーー！」

格闘する」と数十分。よひやくへつた。もつらしどぶつ壊すといだつた。

「やつとつせたか馬鹿め。」

「アイなんぢやらのつけ方は知らん。」

てか神いつのまこいたんだ。

「アイなんぢやらひて……お前輩へのも嫌か」

「あとこれに説明入つているから勝手に読んで。」

「分かつた。」

「それじゃあこつかまた会おつ。」

「また会つことになんのかよ……」

「わよなうだ。」

やつ言つて神は帰つていつた。

あ、名前聞いてねえ。まあいいか

「えへ…あ、あつた。」

能力の使用制限について。

1、出せる物の1個の最大の重さは600?。

2、それ以外のこの世界の生態に悪影響を及ぼす物は出せない。

3、出した物は自身が伸ばそうと思わないと1日で消滅する。

4、生物は出せない。

最後に、能力を全開にしたい場合、神に許可をもらつことで全開にできるが、4と2は1時間で消滅する。

「ずいぶん規制かかってんな。」

「でも、このくらいじゃないとな。」

次は、世界について。

この世界の名はヴァルハード。厨一病かかってんなと思ったが無視。

ここでは、奴隸 農民 商人 下級貴族 中級貴族 上級貴族 王族の順番で成り立っている。らしい。なんせこの体箱入り息子（笑）だからな。ここのことぐらいしか知らないし。学校にすら行ってないぜ。

えと、あとほ…種族か wktk だな。

ひ・み・つ(はあと)

..... 二三三四三四三四三四三四三四三四三四

あの神やつやがつたな今度会つたら必ずしも仕合へやるよー。

ん… いのへりいか。

やつこや両親にひこして言ひてなかつた。

名前は、父がファジー・オル・カン。  
ファザーとか関係ないからな。

母がハミー・オル・カン。

とっても優しい家族。

そつこやそろそろ奴が来る」  
やじや…

「ンンン…」「んんんんん…」

くあ わせだ らふ と ごう うん…!  
き、来やがつたあああああ…!  
嫌な予感がビンビンするつひひひひ…!

「はいはい」

開けるな母よ…!

「お邪魔しま～す」

「何か無いかな何か無いかな」 デラのモンみたいな感じで喰いつくる

「テツテレ～じゃない！」

「透明マント…」

できた！てか本当に何でもアリだなこれ。

「あれ？いないの？なんだあ隙を見て『一々』『一々』」

聞こえんかったが隙を作らないよつこしなければ……

名案思いついた！親説得して少し修行と偽り名の家出をしよう。決  
まつたら即行動。

実は自分の性能を確かめたいからだけど、奴は9歳のくせにしつこ  
いからな。

なんか嫌なビジョンが見えたよつな……

**説明……奴が来たー！（後書き）**

感想やいつしたらいなびのアドバイス等があればぜひお願ひします。

12月13日 ミスがあつたので修正。

15までお預けを…（前書き）

今日は少し調子のついて早めに投稿しました。

誤字脱字がありましたら、報告願います。

## 15までお預けを！！

さて、突然だが報告する「」ことがある。俺は15歳まで旅に出られないと！

つまりだ母親曰く「あなたは貴族なのよ！しかも9歳！ありえないわ！」と

父曰く「行つてもかまわんが、まだ早い。人攫いに攫われるかもしれないからな。」

だそうな。ザ・正論。それまで何していようかね。

とつあえず散歩しよう。

「……どうしてこうなった。」

何が起こったか、それはだな…

1、歩いていた。

2、いきなり奴が出てきた。

3、現在。

「？ 何のこと？」

「……」

うぜえ……

こうなつたら……

「え? どこ行ったの? ねえ? フィシー?」

俺の名を呼ぶな。ちなみに今は透明マントをつけている。見えないとかざまあww

「んもう一せつかく見つけたのに……」

スタスター……

「行つたか。」

散歩は危険だ。てか何故あいつ領地に入つてきてやがるんだ? 気をつけなくては。

と叫びわけで鍛錬しましょ。

「まあ、どうへらり出せるかだな。」

ステ〇ス迷彩〇K。  
ビ〇〇モドアダメ。  
M4A1ダメ。  
ナイフ〇K。

何じゃこりゃ。

ああそろかここで ドアは時空に負担が掛かり、M4A1は残弾がマガジンに入っている場合、環境破壊に繋がるからか……

少年改良中……

「できた！」

どこのアハ無理。まあ仕方ないね。後々考えよう。

M4A1は何と言つたか、質量のある残像的な感じで撃つて当たつたら消える。しかし、質量はあるので貫いたりもできるらしい。神曰く「お前想像した物も作れるぞ想像力次第だがな。」アイなんちやらに容れとけよ。あれか、面倒か死なせたくせに上から目線?でもかも面倒臭がり屋か、畜生…

気を取り直してやつていこう。

訓練開始だ!!

ダダッダダダダダカチャツカチャカチャガチャ…ダダダダダッダダ  
ダ……

これは予想外。本気出したら少しも銃口ずらさないように全速疾走  
できるwww  
神、さつき「めん。ただこれ強すぎじゃね？」

「大丈夫だ、問題ない。」

「ぼふうう」

「出てきやがった！」

「相変わらずひどい。」

「サーセンwww」

「じゃがんばれよ。」

「何しに来たんだ？」

「様子見。」

「しっかり働けよ。」

「お前もな。」

帰つていったか……ふう。さて再開するか。

15までお預けを…（後書き）

次ぐりには15歳までキングクリムゾンしたいなあ……

感想やアドバイスがあれば下さい。

## 15歳になつて……（前書き）

やつと本編っぽいのに入れます。地味に長かったw  
誤字脱字がありましたら、報告をお願いします。

## 15歳になつて……

さて、またいきなりだが15歳の誕生日を迎えた。のだが、何てことだらうか目の前には「ゴザオズ」と言つまゝ、なんと言つか、でつかいムカデみたいなのと対峙している。数?え?...約100体。すぐ終わらせるか。

M4A1を出してと…

「うおおおおりやあああああ」

乱射しまくる。弾数はずつとマガジンの中で作りっぱなしだ。6年やつてきたからそこ慣れている。弾はやつぱり出しっぱなしだと環境に悪いと思い、当たったとき以外は地面に着いたら消えるよう想像している。俺の能力は想像力次第で強くも弱くもなれる。ミリオタ……とまではいかなくともそれなりに銃器には詳しいので想像しやすい。弾の想像も6年でなれたものだ。

「ふう……終わった。」

まあ声を出さなくともできるが、なんかその方がいいと想つ。

「さて帰るか。帰つたらもつと面倒なるかな?」

15歳。つまりそれは俺が旅立つ歳である。奴<sup>ゴース</sup>にも伝えたら「私も行く」と言いはじめたのでとりあえず15歳まで待つて、それから決めてくれと言つている。ん、話がずれたな。つまり15の誕生日は奴<sup>ゴース</sup>の決断の日。そして、両親がいろいろと用意していくそなけつこう大切な日である。

何故そんな日にでかいムカデと殺りあつていたかと言つてだな、はつきり言おう。散歩してて襲われた。それがムカデ×1。そこから仲間が来て100になつた。それだけだ。まあ良い肩慣らしにはなつたので良しだよ。

そだ。あいつらに見つからないようにしないと。あいつらは数が多く、俺にとって何より対処しがたいからな…

なに言つてるか分からんと思つ。少し説明する。

俺は歳をとるにつれてどんどんイケメソになつていつた。自分が憎く感じた。ブサイクのほうがまだ活動しやすかつたのに…でも現実は違つた。どんどん成長することに追つかけが増えてきた。この歳になるとありえないほど精密な魔法を放つて確実に捕らえようとする女まででてきた。この前なんて刃物をもつて真っ向から向かってきた。正直生きた心地がしなかつた…

と言う訳でステルス迷彩を作る。能力も使えるようになつてきたのでじつゆうのも作れるようになつた。おk消えた。帰るぞ。

「ただいま～」

なんと今日はあいつらがでてこなかつたな。ラッキー……あ?

「「「おかれりなさいませ。」「」」

「は？え？なぜ君たちがここにいるの？」

「「「今日は誕生会および出発会だと聞いたので。」「」」

「ぬよ。これはまどかのことだ？」

「ええと……その……教えてやった……」

「酷いや……」

O R N

「まあいいじゃないか賑やかなほうが。」

そつかい。

「さあレッシ・パアアアアリイイイイだあああ」

なぜそれを知つていい。てか人格壊れたか？父よ。

そうして夜は更けていった……

そういうえば奴<sup>ユース</sup>来てなかつたな。明日に来るよう言つたしな。奴<sup>ユース</sup>は来るか？いや、最後になるかもしれんし行かないのなら、ユースと呼んでやるわ。

まあ、一緒に行きたいといつても呼んでやるか。べ、別にツンデレじゃないんだからな！！なんてね。

実は女嫌いではないんだ。ただ嫌いなタイプがあるだけなんだが、それがほぼすべての女に当てはまる。まずは、金目当てで近づく女。そして、地位目当ての女。俺は前世でも顔以外は少しばかりあつたので、それなりに中学はモテた。俺も恋人を作つた。前世での最初で最後の彼女だった。彼女はやはり金狙いだつた。甘い言葉にさそわれて気が付いたらこずかいがパア。それならよかつたが、高級なバッグなどをほしがつた。それを断ると「じゃあ別れよう」だ。今になつたらおかしいと気が付かないほうがおかしいと思える。ここまできたら分かるだろ？つまりユースが来たら、そいつの気持ちは本物だと言つことだ。そうなら俺はその気持ちを真っ向から受け止めようと思つ。……ふふつ明日が楽しみだな。

そうしてフィシーは眠りについた。

## 15歳になつて……（後書き）

なんかいい感じのよ'うな……何故このよ'うにしたか、それはタグの恋  
愛が意味を成さないからです……恋愛っては消させてもいいますよ w  
w  
感想などあればお願ひします。

あれ? これ、 テジヤヴ? (前書き)

すいません。入れたかった話なので入れさせてもらいました。

あれ? これ、 テジャヴ?

「 より。 久しぶりだな。」

「 いつぞやの…!」

「 こつぞやの…! ジャネエヨミセツカく来てやつたの!」。

「 何か用事か?」

「 ああ。 少しばかりまずい。 主に神としての立場が。」

「 はあ? お前それ自業自得で自分で解決したから俺の件じゃないんじやないのか?」

「 セウルなるとこなんだが、「 ほかの神がその少年を助けた意味は? 」とか聞いてきてな。「 魔王送り込んでそれ倒せたらその罪はなかつたことにしてやる。」だと。」

「 つまりほかの神が送った魔王なるものを倒せと。」

「 セウルだ。 どうか頼めないだろ? 」

「 そう言われてもな… 魔王だろ?」

「 セウルだ。 こちらもやばいのでそれなりの協力はしようと思つ。 なにせあつまは最強クラスの魔王だからな。」

「 鬼畜だなあ。」

「ずいぶん冷静だな？」

「今のおまじや勝てないんだろ?」

「…ああ。いくらなんでも出せても体が追いつかないからな。」

「なら身体能力の底上げをしてくれ。」

「…それだけなのか?」

「ああ。」

「ふふつ良かつた。もつと多くの事を突きつけてくると思ったぞ。  
まあ今の体じゃ無理だがな。」

「えいわい」とだ?」

「お前の転生のためと能力。そして魔王が出てきた」とこの世界への影響を抑えるために力を使つたからな。悪いが少し眠る必要がある。能力をやつたらしばらく会える。すまない。」

「気にするな。それで十分だ。ゆづくつ休め。」

「実はいい奴だなお前。じゃあ言葉に甘えて……」

意識が消えていく中、そんな言葉が聞こえた気がした……

朝起きたら

「世界を救わなきゃいけないのかねえ」

なんてつぶやいてしまったのは仕方ないと黙りつい。

あれ? これ、 テジャヴ? (後書き)

神は眠りについたのだ。

すいませんただの我慢でした。

感想などあればお願ひします。

## 旅立ち（前書き）

一回書いたのぜんぶ消えたorz

## 旅立ち

……準備完了。といつてもほとんど何もないけど。

コンコン

！

「いよいよ終わったよ。」

「分かった。今行く。」

「それじゃ、行つてやるよ。」

「行つてらつしゃい。必ず帰つてきなさいよ。」

「ああ……行つてこい！」

ガチャ バタン

「よし！ いくかコース！」

「え？ 今なんて……」

「いや、だからいくかコースつて……」

「ひ、久しぶりにコースつて言われた！ コースつて！」

「そんなに嬉しいか？」

「だつて今までお前とかだつたから！」

「そうかい。」

「つゆうのも悪くはない。コースが好意を寄せているなら、それを受け止めてやるつじやないか。本気ならね。」

「…… // /」

「ん？ ビーフした？」

「本……当?」

「何が？ その好意とか……」

「聞いていたのかてか口に出てたのか。」

「うふ…」

「嘘言つても意味ないじゃないか。」

「やつた……」

小さい声で聞こえなかつたが、まあのち分かるだろ？。

「ほり惚けてないでこぐれー！」

「あ、うん」

ビハーハリウなつた。

歩いて数分。盗賊さんがいた。

「おいお前。金と女置いていけ。」

……あまりにテンプレすぎて笑えない。

「うん。それ、無理。」

とりあえずナイフだ。ゴースに見えないよつに殺る。

ザヒュ…

ブシヤアアアアアア！

嘘…首落ちたぞ…！…そんなに俺のナイフの切れ味が良いわけがない！

ん？そつこやこの体勢…抱きついてね？

「はふ～」

「ゴース？大丈夫か？」

「よくもやつてくれたなあ」

あ、上のやつ俺じゃなく盗賊B。

「野郎共！やれえ！！」

ワーワー！！

何だナイフでおkジャン。

シハツ！サツ！サムー・ジャムー！

大変上手に殺りました

一  
ニ  
わ  
ケ  
口  
し  
な  
」

みんな首と体が離れてる。これはケロイ。

一回場所を移すか

「何故氣絶したんだ？」

コースの顔が赤くなつていいく。なにがあつたし。

「だつてフイシーがいきなり抱きつくから…」

「それはすまんかった。」

「いやいこよ。……もつとじてくれてもブシブシ」

「お~い帰つて!~い!

「はー..」「めん。」

「そろそろ行こう。場所は決まつてないけど。」

「うん。」

## 旅立ち（後書き）

1回消えたときは頭が真っ白になりました。

2連投するものじゃないなと思いました。懲りなくやりますが。

もう一つ、結構仲いこみな……もう結婚しよう。

末永く幸せに爆発しろ！

感想などがあればください。

次の町は... (前書き)

アクセス5000超えたwwwwwwwwwwww

ありがとうございます!!

次の町は…

「 よくも俺の子分をやつてくれたなあ …」

説明しよつー。親玉が首チヨンパの子分見つけ。しばらくして俺たち  
発見。キレる。以上。

「 なんかしたつけ? ねえフイシーなんかしたの?」

「 ちよつと奴の子分がやつてきたんでボ「ボ」！」。

「 ふ～ん。」

少しほ驚け w

「 なにぶつぶつ言つてやがる…野郎共かかれい！」

今氣がついた。こいつおそれく副親分みたいな奴だったのか。親分  
死体があつたから自分がなつたてな感じだろうな。理由? やれえだ  
と殺せみたいな感じするけど、あいつかかれえだつたし声裏返つて  
たから。

「 あぶなー。」

いきなり剣振つてるとかあつえねえ。ビリの不良… て不良か。  
ひとつあえずナイフで応戦… あるとでも思つたか? あ、でもコース見  
てるしなあ。応戦しておこひ。

ガキイーン!

「小僧シネエ！」

「だがこそ」ドガアン！！

—なんぞ！？

そこにはすぐ黒いオーラを出しながら魔法詠唱しているユースがいた。こええ…

なにせ二でしるのかな?怒るよ?」

怒ってるじゃん！一発の魔力が高いよ！？

声裏返してしかも囁むておもひにし

卷之三

二二

よく私の

- 구-즈? 구----즈! !

「ハッ！な、何？」

「血とか肉とか見たくなかつたら田舎へで…。」

「え？ う、うん。」

「よし……ナア アイフー アンドオオ、ナア アイフー！」

ナイフだけじゃんかと思つだろ？ 片方だけ血みどりの「あの」ナイフなんだよ。盗賊を殺した、ね。

「こきがつてんじやねエエー！」

「お前がなあ……」

スパーーン！

……スパーーン、スパーーン、スパーーン

あり？ もしかして斬ると言つ感情が強すぎて想像に影響したのか？  
ほとんどの首とんでつたぞ。  
まあ新しく能力の事を知れたとゆうついで。

「ひ、ひえつ……」

「た、退却！！」

逃げていく。逃がさんよ？ また来るんだろ？ 逃がしたら。  
投げナイフだな。

シユー・シユー・シユー…………ザザザシユー！

おおおー！ さすが身体能力底上げー投げたことじりつまつ心の臓に的  
確にあたる！

あ、コース忘れてた。

「気持ち悪くても良いなら田あけてもいいぞ。」

「…うん。 ……うひ…」

「大丈夫か？吐きたいならついて来いー血の臭いが来ないとひまで行くぞ！」

「わ、分かったよ……うひ…」

「よし、こぐれ…」

「すつきつしたか？」

「ふう…ありがと…でもまだ気持ち悪いよ。」

「分かった。しばらくしたら行こう。」

地図地図つと。確か……分からん。  
誰んだか？やべえ！

「ひつと待つてね。」

「それまことによ……何か地図ない？」

「わのまわかわーーー。」

「まさか……」

「あ。」

「えりのへんじー。」

「よし、行こう。」

「うさ。」

「あなたがこなるか？？」

「無いんだね？」

「はい……その通りで、『ゼロ』です。」

「はあ……やつぱり。じゃあここから近い町に行こうっ！」

「どう？」

「レバース。」

「うわ……悪徳商人が居るとかよ……」

「大丈夫だよ。あとギルド行くんでしょ？じゃあ尚更レバースだよ。」

「仕方ない。レバースに行くか……」

「うん！」

「何事もなればいいのだが……」

## 次の町は……（後書き）

ユースは魔法を使えます。主人公は少しばかり気が狂つて……いないんですが、基本的には近距離と中距離において、格下だと思った奴に対してはナイフしか使いません。まあ、ナイフのほうが想像しやすいですね。

## 到着（前書き）

キャラの描写がないのは、あとでキャラ紹介をしたいと思っていて、そのためについているからです。

「ふう、やつとか。」

「長かつたね~。」

魔物出やがつたりしたから仕方ないと思つぞ。俺の能力の説明もしあし。すごく驚いて面白かった。

とゆう訳でレバースですよ！悪徳商人には会いたくない！人身売買やってるらしいし。どこで知ったかは秘密だ。別に使用人に脅しをかけたとかじやないぞ。絶対だぞ！

「さて、どうする。」

「旅するんでしょ？冒険者ギルド行かないと。どこかのギルドに入らないと買い物できないらしいから。」

食べ物出せないのが俺の悪いところ。

「そうだな。今貴族なんて言つたら、どつかの悪徳商人に連れてかかるからな。」

奴隸としてな。

「じゃ行こう。」

着いた。見た目かい？フェアリー・テロルのギルドみたいなのだ。うん、実際にテンプレ。

ギィイ

ガヤガヤ……

「……が……」

中はカウンターが奥にあって、その横にバーみたいな。逆に食堂みたいな。カウンターの近くに掲示板がある。

「とりあえず行こう。」

「登録の方ですか？」

「「はい。」

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・

「なるほど分かりました。」

え～と、長かったので要約。

1、ランクがあり、GからAまで。その上にまたテンプレドゥランク。

2、依頼には様々あり、期限付きは慣れてからの方がいい。

3、初めはGランク。

4、買い物が少し楽になる。

5、人権を獲得。

6、カード再発行には金がかかる。

だそ～だ。

5が一番必要だ。貴族と名乗つては居られんから冒険者で隠す。

「では、この石に血を1滴落して貰下さい。その情報をもとにカードに書き込みをしますので。」

2つナイフが出された。まあ分かつてたけどさ。石でかくね？岩石じゃね？1滴で足りんのか？

「うーー！」

コースが先にやるとほ。じゃあ俺も…

「ありがとうございます。では明日来てください。」

「分かりました。よろしくお願ひします。」

「宿探せつ。」

「え～その前に買ひ物しようつよ。」

「だが」、「いっからーね？」

「はい……」

「とおり」と市場。「世界の金はテンプレートに銅貨、銀貨、金貨、白金貨で構成されていて、銅貨一枚100円ほど。銀貨は100円、金貨は一枚10万ほど。白金貨は一枚100万くらい。平民は1月金貨2枚。意外と裕福だ。場所によるけど。

「へ

「どう行くんだ? 食料?」

「…………」

「なんだその汚い物を見る田は。」

「いやあ……気持ちを知つていながら鈍感ぶりを發揮するとまねえ……」

「よく聞き取れないぞ。はつきり言えよ。」

「なんでもないよ鈍感フイシー君。」

「ど、鈍感だと……?」

「もうここの行こう!」

「やつちは市場じゃないぞ?」

「もうここの一宿探すよ!」

「は、はーーー。」

なんだかつ。すいへ怖い。

「ううあらわぬか。」

質素でことと細い。

「却て。」

「何故……?」

「かくへしよまー。」

「質素じやん。」

「ちー……」

「ちー……」

「うあらわぬよー。」

「派手じゃないか?」

やつあるドーブ……チふんげふん。

「うあらわぬのー。」

「分かってましたよ。」さすがにいりんでしょ。」

なん・・・・・だと・・・・・中が質素でとてもいい所だ……

「どう? ここのじゅう?」

なんだそのしてやつたり顔は。

「お泊りですか?」

「はい。」

「1部屋ですか? 2部屋ですか?」

「1部屋で。」

話を勝手に進めるな! 2部屋だ! -!

「え? あの? ちよ?」

ほら動搖してこねじやん!

「いや2部屋でいいよ。」「1部屋で。」

……やめて。分かったから殺意を引っ込めて-

「分かりました。ベットはびりこたしますか?」

びびつているなこの人。

「一つで。」「だが断る……」つだ……」「チツ

「えええコースが怖いぞ? 今日はなにがあつた?

「滞在ですか?」

「はい。一週間くらいは。」

「では行くときの支払いでいいです。」

「では」

「夕食なども料金がかかります。お風呂もありますが、高めの料金になつてます。朝食もかかります。」

まあ俺ことっては気にならんけどね。H A H A H A。作ればいいのや!…外道?ほめ言葉やー。

「ありがとうございます。」

「では」

「なぜ怒っているんだ？」

「なんでもない…もうここや…」

「冗談だ。」れども

女性に贈り物は嫌な経験しかないが、とりあえずミスリルをベースにして、十字架をアレンジした剣みたいなデザインを想像して作つた。お気に召すかね？

「…？」

「どうした？ 要らんのか？ なら戻してくれ。」

「こやじやいや貰いますーーーぐだわーーー」

「ふふっ…まあいいわ。」

「ありがとうー。」

「氣に入ってくれたかな？」

「うんー。」

「やじつはよかつた。」

その頃、1匹の猫がこちらを見ていたのに2人は気が付かなかつた。

**到着（後書き）**

コースって名前オリジナルだと思ってたら違ったorz

感想などあればお願ひします。

アイボーナンス（福利厚生）

いや～……恥ずらいなこいつ。

アイポードH……

翼口。

「おい。……お~い！」

起きないな……

「まかせろ。」

「は？」

何かいる！猫っぽくて喋っている何かがいるぞ！

「いや……あの、どちら様？」

「ん？ああ、この姿だと分からぬか。俺だよ俺。神様ですよ。」

「ちよ~おま~寝てうし~」

「こつものお前じやないな。」

「こつもとじつへつてるんだよ。」

「かわいそつ……」

「なんだ？その田は……て、まあいい。何故そくなつた。」

「ああ。じつは、お前の能力に枷掛けたら、その分チカラがもどりてな。この体は分身に近いぞ。ちなみに本体は一〇〇動見て爆笑している。」

「まじか！俺にも見せろーー。」

「ちよ ワセにかよ シベリコツクナシ ママ」

「ひつせ見たいもんは見たいんだよ。」

「これ以上チカラ使つてらんない。消える。」

「え？ それじゃあ俺の能力本氣出せないの？』

「いや。この体がお前と融合すればOK。』

「なる。痛くは？」

「ない。」

「いいね！…融合しちゃうの動見よツキー。』

「まだ言つか ママ」

「ああ。いいわ。こぐらりでも。」

「そんでお前と一緒に行動しようつと想つんだが、ただの猫とおりいで扱つてほしい。」

「いいが、名前はどうある？」

「悩みこむ一人と一匹。シユールだな。

「わづだな。クロでここせ。」

「ビ」の捨て猫

「まあいいだろ。猫だし。見た目。」

「わづだな。でも、エヘモウ「断る」へいひ。

「あれあんまり気持くせへないんだよ。俺こといつこゑ

「猫のくせに生意氣だ。」

「ふああ～。あ、おはよう。」

コース起きたり。

「おつおはよひ。」

「じつかりリア充してんな死ねばーいのこ。」

「この顔こしたのはまだれだ?」

「ああてね。」

「クロだ。みゆこへな。」

「クロだ。みゆこへな。」

「あ、みゆこへ。」

「ヒーロードクロ。お前戦えやっ。」

「無理ボ」

「ですよね～」

じゃあ俺の肩で

「自分で歩くや。」

「お前も心読めんの?」

「顔にてるや。」

「サー、セン。」

「あらそりガルドー、アリバサセー。」

「アリだね～。」

準備して……あ

「クロ、こたらアイパオゾー、うねえじやん。」

「こや、二〇〇動見れるよひに改造すれば、ぐふふ

「おぬしも悪よの。」

「こえいえお代官様モボディですか…」

「何してんの？」

コースに由比田で見られた…

### 冒険者ギルド

「これがあなたたちのカードです。」

「ありがとうございます。」

「今日早速依頼を受けますか？」

まだいいよな。

「いえ、今日はいいで。」

「そりですか。またのおこしをお待ちしています。」

「カードの確認してねえ…」

名前 フィシー・オル・カン

性別 男

魔法 G

運動 S

力 S

特殊

倉庫：いつでも600キゴ（一キゴ＝一キロぐら）までならなんでも出せる。

武器庫：神のチカラを借りて何でも出せるようになる。

身体能力異常：すべての身体的能力を限界突破させる。

は？」／「あんの？」

「なに驚いてるの？」

「なあユース。／「つて何だ？」

「ん？ 確かその人の本当の力を示してたんじゃないつけ？」

「お前は？」

「40だよ。結構高いのかな？」

「俺1なんだが。」

「ええ…？」「そお…！」

「まじだ。」

「仕方ないって。神に貢ったに過ぎないし。」

「盗賊は大体5～7だつたつけ。」

「お前らさあ。一回宿もどらねえ？」

クロが言つ。てか、分かりずらいな。

「それもせうか。一旦もじるつ。」

「クロ。」

「ん？」

「語尾変えて。」

「わかつた。せや。」

「切り替えはせつーー。」

アイボードH……（後書き）

神とワイシー分かりずれえ　ww

リアフレよ。これ以上ほかの奴に明かしたら貴様ヲブツコロス！！

## 能力革命。（前書き）

遅れました。試験があります。このペースです。以上。

## 能力革命。

「融 合！」

ピカアアア！

何が起きたかわからんだる。クロと融合したんだよ。あ、別にR-18展開じゃないから。フローのヨンみたいなのだから。ほんとだぞ？

「成功にや。」

「すうじいなこれ。」

一つの口から二つの言葉が出でているが大丈夫だ、問題ない。

「どうゆうひことなの…？」

コースさんお困りですね。

「説明しよう。クロと俺が融合して、猫耳を生やし、爪が鋭くなつた拳句、「能力の力が更に強くなるのにや。あと、ハイテクションにもなるにや。」「言葉とんないで…」「サーセンwww」

ちなみに、知識共有もできるぞ。本人が許す限りでな。

「へへそなんだ…」バタッ

「ちよ 何故倒れたし www」

「きっと理解が追いつかなかつたんだにゃ？」

「おｋ　ｗｗ理解したｗ」

「んで、能力が強くなるとは？」

「つまり、今までお前の想像で作り出せていたのは兵器とかだろ  
うや？」

「ああ、ただナイフだけはキチガイな強さだったが。無理ににゅあつ  
て喋んなくていいぞ。」

「分かつたに…分かつた。ナイフはお前の気持ちが強くていたも  
のだ。気にスンナ。」

「なるほどな。殺すと思つたからか。すつきつした。」

「それで、能力のことだが、お前の見ていたアニメの装備なども使  
えるようになる。」

「ほつ…たとえば？」

「そうだな…禁書の妹達の装備とか。すまん、あの野郎（神）イン  
デックスのほうが好きみたいだ。」

「お前…自分の本体にむかつてそんなこと言つなよ。ま、いい。ん  
で、そのほかにエクスカリバーとかできんの？」

「できる。だけど、時間制限がある。30分だ。」

「「」の姿がか?」

「ああ、わかった。」

「シラボリンヌ」

「自分からもでかねが、面倒だからお前やつて。ただ解除つて書つだけだから。」

「解除好きだな……解除。」

シユポ!

「え? つて戻つてる。」

「「」なんなかんじにゃ。」

「おぐじや融 合一…すのとまは「「」や」なしでお願いする。」

「分かつたにゃ。」

「ゴース殿! しつかりなされ! ゴース殿…おつや…! ガスッ

「『さふー』」

コースがあまりにも起きなこので殴りてみた。軽くだからダイショーブー…多分。

「なんか盗られた氣がある『さふー』…

「『さふー』めん別にそんなつもつじや…」

「まあまあこいじやないか。そんなことよつ、ギルドに行つせギル

「…待つ『さふー』」

珍しく?燒てるクロ。

「びつした?」

「魔王がいつまであたひる…『さふー』

「はあああーー?」

「魔王?なにそれ美味しいの?」

コースよ。こんなとひで使ひ始めたじやなこ。つてつじやなくて!」

「何時いつ来る?」

「あと一戻りで来るにやー！近くの村が消えていつてこぬナビ、まだこつちは来ないと思つこや。」

「何故だ？」

「どひやらまだ力を使ひこなせてないみたいにや。」

「魔王強いの？私たちの邪魔するなら殺すナビ。」

「無理にやー！魔法は消されるにやー！コースちやんは少しばかり引っ込んでほしににやー！」

「ガーン…」

コース沈黙しましたー！やばいハイテンション継続されんのか。前世のネタがぽんぽんである。

「今はどひにいるんだ？」

もしドリカに滞在してこるのはなうが、一気に後ろからやひへりんて…

「元アスリ村にいるにや。どひあるのこや？」

「なあに、少しばかりの潜入さ。」

**能力革命。（後書き）**

短いですね。 サーセン、えとその、 次回、 潜入の掟！ 見てね！

やつぱり装備は入念に！（前書き）

サービス… サービス… はつきり言って装備確認するだけです。  
すんません。

やつぱり装備は入念に！

「なあクロ。」

「ん」「や？」

「魔王つてどうぐらい強い？」

強すぎてありさり勝つのも嫌だし、負けたら死んでしまうからな。

「う～ん…同じくらいだにゃ。全力と。」

全力ねえ…え？は？ぜ、全力か？

「M A J H D E ?」

「M A J H D E ? !」

「嘘ダアアア！」

「じつしたんだにゃ？全力以上だせばいいじゃにゃいか。」

「あ、なるほど… ってなるかああ…！」

「見事なノリ突っ込みありがとう。でもなんとかなるつて。チート並みは1個限定でしかさせないけどにゃ。」

「え？ちよ？さらっと新事実言われても…」

「がんばれい！…」「や。」

「なんだかなあ…」

数時間後。

「そんな装備で大丈夫かにや？」

「大丈夫だ、問題がある。お前俺の装備見てから言え。イーロック  
じゃねえんだよーおもつくそアサロンだぞ？馬鹿なのか？アホなの  
か？死にたいのか？」

「す、すまないにや。どうやら情報伝達に間違いがあるようだにや。  
……オイコラ俺ゴローなにやつてんだよー！あ？情報圧縮したあ？  
当たり前に混ざるだろうがー！それでも神か？俺か？いつべん死ね  
！……じめん。少しあつちの俺に当たつてきたにや。」

「ストレス溜まつてんなあ……そうこや、チート武器何使つてい  
い？」

「自分の好きなよつに。お前单独で行くんでしょ？」

「お前来ないの？」

「来ないとチート武器無理じゃね？」

「なんでこいや？行かなきゃダメか」せー。

「取りあえず来い」

「はこねこい。」

「あ、言こ忘れてたいや。チート武器は、お前で一個、融合…  
で4個だこや。今あつから連絡で伝えられたこ。せー。

「ナイフはチート武器か？いや、チートでできるのか。  
そつなると利便性がたかくなつていいな。」

「わあそろそろこへく……離して。」

すっかり忘れ去られていたコース15歳が寂しそうにこちらを見て  
いる。

「こべの…？」

「え？うん。まあそりゃ行くけど。離してくんない？」

いや、あのずっと女から離れていたんで、上田ずかいやめてくんだ  
い。死んでしまいます。もえ」…げふん、げふん。

「じゃあ帰つたら初めての…」

魔王に戦い挑むのは、確かに死ぬことだな。しかし、初めてってな  
にかね？あ！あれかはじめてのチユウつてやつか。そうコウコトに  
しよう。うん。でもあいつ男耐性あつたつけ？ちつさい頃から俺を  
追いかけていたくせに盗賊サンのとき様子おかしかったしなあ。意  
味分からん。

「フイシー。DT卒業式www」

「アーッ、アーッ、ナニモキムロナライ。ナニモキムロナライ。」

「ああああああ」

「あとで逃げよう。付喪神ってここなーのであるかーー。」

「ああああああ」

## 装備紹介。

今回使つもの。

フィシー・オル・カン

頭・アサシンのフード（顔が見えなくなる）

腕・アサシンの手袋（壁がつかみやすくなる）

胴・ミスリルの鎧（軽くて着心地抜群！－アサシンじゃないのは気に入らない）

足・いつもの靴（いつもの靴のはづがいいと思つた。反省はしていない）

武器・ダブルアサシのブレード（よく刺されるあの暗器）、投げナイフ（どつかのメイド長なナイフではなく）、アルタールの剣（アサシン・コードのゲーム内最強ランクの剣）

クロ

頭・モンローラのアレ

胴・上と同じく

武器・なし。

「そんな装備で大丈夫か WWWWW」

「大丈夫にや。問題にやい。」

「やばくなつたら?」

「融 合…するにや。」

「やつぱつねwww」

やっぱり装備は入念に！（後書き）

主人公DT損失の危機。ユースさんかなり不安です。まあーさんと戦いに行くから当たり前か？基本的に、クロとフィシーの2人？にまかせると大体不真面目になります。仕方ありません。指が勝手に動いてますし。

エルシャダイ買おうかな…

決戦（笑）（前書き）

遅れました。

## 決戦（笑）

ども。フィシーだ。いきなりだが逃げたい。  
すんごく逃げたい。なんでか?少し遡る。

10分前

「アーリーだらり」

「……か。廃墟じゃないか。」

リアル世纪末な風景だ。まあコンクリとかないから魔物に襲われた  
村だから少し違うが。

「魔王どこだ？」

「おれ」

一軒だけ普通に家が建っていた。魔王つてこんな風に町滅ぼすつけ？

「いぐれ。」

「あい分かつた。」

さて、今その家のおそらく寝室の前にいるんだ。  
「カウントは？」

「5。」

「分かつた。」

「5、4、3、2、1…GO…！」

ガチャ！！

「お前が転生者か…」  
そこには……

現在・・・

そこには、漢がいた。いや、ミズじゃなくて、男じゃなく漢だ。体見りや分かるつて。想像どうりムキムキな30代のおっさんが全裸でいた。おええ…吐きたい…クロモ吐きそうになつてゐる。

「答える…お前か？」

「気持ち悪いな…」

「ああ…そうだ。」

「ならば決着をつけよ。わあ、行くぞーーー！」

「は？…ちょ？…までー決着も何もないからー合つて数秒だぞ？…ふざけんな！…あと全裸やめろーーー！」

そう叫んだあと、魔王の姿が消える。そして、田の前に来る。「ぐふうーー？」

「どうした？その程度か？」

随分なめてくれるねえ…冷静になんかなれなくなつてしまつたじやないか？

知つたこいつちやねえか。

「いのせえな。しつかり相手してやるかひこよー。」

「せやけーー！」

田の前に来るなんであつきたりだな！

「甘いんだよー！」

そのパンチを避けて顔面に蹴りを入れる。だが、少ししか効いてな

いたいだな。さすが魔王。きもいけど

「軽いな。」

足を捕まれそうになつたが、なんとか回避。狭い空間での戦いはきつい。早く決着をつけないと……！

「がはっ」

魔王の蹴りが丁度良くみぞおちに入つたか  
息ができない…

「早く立て。それとも、もう死ぬか？」

うるせえな…今の中に用意しとくか。治つたが魔王は分かつてない  
みたいだからな。さて、困つた。奴は暗器では殺せないだろうな。  
スピード的に見てあつちが早い。となれば…やはりクロが必要か。  
そういうやクロはどうだ？

聞こえてるにや。テレパシーにや。今からせつけて行へ。

分かつた。

「「融 合ーー！」」

「のわっ…」

びひする…

そうだな。まあ時間をとめよつ。

は？何で？

あるメイド長のナイフだ。」の体だとその武器の持ち主の能力の一  
部を使えるようになる。

俺メイド長は分かっていてもナイフは分からんからだせないぞ？

「ひひひ出で。

分かつた。

「なんだその姿は？」

「「ああ~氣にすんな……どうせ死ぬんだからな。」

「ふざけているのか？」

「「お前がなー。」

時を止めろ。

静寂な時間だな。

いいから急いで殺れ！止められた時間は少ない。

！　～解～！

「　～ひひひひひあああああ　」

まず、ナイフを大量展開。そのあと銃弾を開いてここに打ち出し魔王に当てる。この時点でもうぐちやぐちやじやないか？

まだだな。破片がなくなるくらいこじやないとダメじやないか？

それはやりすぎだな。

ダメ押しに銃弾を追加。さあきより多く。

あと5秒だ。

じゃあナイフのあとに硫酸と塩酸が落ちるようにして……

「やよいづなら…魔王」

「…・・・・・があ・・・・!」

魔王は蜂の巣になつた体に大量のナイフが突き刺さつたあと、焼けるような痛みをもつたんだ。つーか溶けてんだ。もう生きまい。

ああ、終わつた。帰るつ。

「急いで行くぞ。」

骸を見ていてなんだが罪悪感が沸いた。何故だらうか。

「ああ。」

なんか…嫌な感じだ。

## 決戦（笑）（後書き）

いや、あの、その、「じめんなさい。何と書つかその…戦闘シーン苦手です。」「じめんなさい。

PV10000これましたー。あつがと「じめんなさい」。

## もうやだこの人。（前書き）

ども。かなり試験勉強で忙しかったのですが、取りあえず魔王の話を終わらせたかったのでやりました。

もうやだこの人。

クロが連絡した後、その場から立ち去つて今宿に着いたのだが、ユースとの約束をすっかり忘れていたのだよ。んで、自室の前で逃げようともうん♂：ガシイ 捕まっちゃつたＺＥ

「何してこらのかな…？まさか逃げるの？」

「うはｗ魔王より怖いｗｗクロ逃げたしｗｗてか俺もやばい…逃げよう！」

「逃がさないよ？」

「オレハトウリスガリノオトコノゴデス。ハナシテクダサイ。オネガイシマス。」

「嘘はいけないなあフィシー君？さあ部屋に戻りましょうか？」

「オレチガウダカ」「うわなにするやめ…」

バタン…ガチャ

かぎ掛けやがつた！俺脱出できないじやん！それに初めてはやばい！あと年齢的にもやばい…逃げ逃げ逃げ…

「まだ抵抗するの…？諦めなさいよ…」

怖い怖い…

「いやでも年齢とか、ね？初めてはもつと本当に好きになつた人とやりなさい…」

まじでやばい！何がやばいって？コースが血走った目でこっち見て

来るんだよー。ヤンなのが、病んでこむのか？チョウヒン！

「本当に好きだから言つていいんだよ？」

ちよまで。冷静になれ。うん。結論出さね。えーとこの世界では不思議なことに、30まで童貞だと魔力が上がるらしい。んで俺は魔法も使いたい。しかし、今ここで、コースにとられる。結論、魔法諦めなさい。

「はあ…分かつたよ。」

食われます。

「お楽しみだったにゃ？」  
クロがやつてきた。

「わづなるのかねえ。」

「わづいえば、任務？果たしたんだろう？」

「ん」「や？ああ、魔王の。」

「わづだ。お前消えたりとか、帰つたりとかしないのか？」

「基本的には死ぬまでこや。まあ、寿命はお前と同じくらいだけど。」

108

「なぜ？」

「いやお前能力の枷が誰だか考えれば分かるにゃ。」

枷はずすのクロだったな。忘れてた。

「わづいやコースはどここつたにゃ？」

名前呼び捨てではコースが怒るぞ？4年前だからにじつか男の子が呼び捨てにして爆発したからな。

「風呂だよ。てか、この世界風呂あんのか。」

「一応。水浴びが温かくなつたくらいだけどこや。」

「十分シャワーじゃん。」

「お前はいつてないのかにゃ？」

「コースが来る可能性大だつたんで譲った。」

「優しいねー。」

「その棒読みはうれしくない。」

「当たり前。」

ん？ コースが出てきた。若干不機嫌なのは気にしない。

「入ってきて。」

「了解。」

さて、浴びてきますか。

「ふいー温かいなあ。疲れが取れる。」

それにしてもこれからどうしたものか。旅の目的は果たしたし、口がどつか行きたいわけでもなさそうだし。取りあえずランク上げに専念しようか。まだ最低ランクだし。

……誰かに見られているような気がするな。

「誰だ？」

気配が消えた…嫌な予感がするな。

タオルタオルっと。結局何もなかつたから良かつたな。取りあえず体拭こいつ。

風呂場から出るとやうに…クロに殺意を向けているコースさんがいた。

「 もう一度いってみて？」

「あ、あ、あ、あの、えと、その、フイ、フイ、フイシーは、て、て、て、転生し、者ですう」  
クロめつがびつてるｗｗやべ俺にヘルプもとめてくるよｗ

「あ、来たんだ。」

「え？ああ、うん。」

「助けてにや～…」

随分怖い目にあつたんだなｗ

「あ、そうだフイシー。転生者つて本当？」

100%純粋な田で聞かれても本当の事しか言えないぜ？  
「本当。」

「……」

絶句。あ、今気がついた。コースはショートカットの方がいい。

「まあ、気に入ンナ。」

あるえ？クロとコースが俺を見てるよ？クロはお前何故ばらす？せつかく俺がんばったのに…見たいな顔。コースはほんとなの？てな顔だ。

「コースさん。もう好きにしちゃっていいにや。責任はフイシーに押し付けるにや…」

「え？ああ、分かったよ。じゃあいろんなことじよつか。ね？フイシー。」

なにそれこわい。え？ちょ、まじ？ちょっとまでえなぜ俺をベッドに連れて行く！？やめて！俺の股間のライフはもう零よ！

「話すのが悪いにや！干からびろー！」

うはｗクロ怖ｗちょいまちｗ後でぶつ殺すｗｗ

「今日はいい日だね。やめようか。」

「いい日だからいや、だよ。」

「もう知るか！…煮るなり焼くなり好きにじやがれ！…」

あ、前世合わせれば30歳童貞だ。やつたね！称号では魔法使いだ！もう盗られたけど。

もうやだこの人。（後書き）

とゆうことで、イチャコラ?回でした。うぜえ　wwとりあえずリア充爆発を初詣で願ってきます　ww良いお年を

**設定資料1（これまで）** 注意一読まないと分からぬことにあるかも（前書き）

PV約1万60000!! ニーク30000!! いつたい何あつたんすか? 絶句した後爆笑しましたwww 駄文なのにありがとうございます!!

これは今までの設定です。

追記、フイシー母とフイシー父が亡れてたみたいで、おじいちゃんが死んでしまったよ。

## 設定資料1（これまで） 注意！読まないと分からぬとあるかも

今までのキャラ、その他の設定です。薄いかも。登場人物が少ないんでww

フィシー・オル・カン

性別 男

見た目 背が高く、顔もイケメン。 10人中9人は一度見する。髪は黒、長さは中途半端。目は藍色である。

スペック 死後いろいろあって、身体能力異常、想像現実。（武器庫などの総称）の能力をもつ。

現状 ユース・ジャン・クドに良い様に扱われている。干からびること間違いなし。

ユース・ジャン・クド

性別 女

見た目 フィシー・オル・カンより少し背が低い。男なら絶対に見惚れる。髪は灰色で、ロングヘア。目は黒である。

スペック じつは王国の魔術士の最高ランク並の実力を持つている。全系統の魔法が使える。

現状 フィシー・オル・カンにR-18行きの行為を行っている。

クロ（神の分身体）

性別 オス

見た目 黒い。一目見ただけではただの猫。

スペック 融合！…をすることができる。

現状 逃走中。

魔王

性別 漢

見た目 筋肉隆々な漢。ビロー兄貴といい勝負。

スペック フィシー・オル・カンと同じくらいの身体能力だが、時間を止められてしまい死去。

現状 神々（フィシー・オル・カンを転生させた神以外）にいろいろ言われている。実は下つ端の神。これからのお番はない。

神

性別 男

見た目 エルシャローイのルシフェルさんみたいな感じ。

スペック 武術はまったくできない。なので、主にデスクワークしかしてない。最近急げはじめてニゴロを見はじめた。

現状 ニゴロで大爆笑中

世界 ヴァルハーダ

大陸名はクルージ。フィシーらがいるのはザクカル王国から少し離れたところ。

ジャロールは貴族の住宅地である。

ザクカルでは奴隸制度はないが、少し離れたところでは普通に行われている。

いや、適當ですね。取りあえずがんばります。

「おい、想像現実って何だ？俺知らんぞ？」

作「あ、いや、え」とですね…クロ頼んだ！」

ク仕方ないにやあ。よく読んで、よく寝て、次の話まで待つにや。

作「あるえ？俺、説明頼んだのになあ？」

「フイ、『作者、ちょっとひじ来たい。』」

作「はい？」

「KIKIだよ」

作「うわあああいやだああああはなせえええ！—！」

「だが断る」

作「まで、話せば分かる……うわなにするやん……」

ク「いつもあつがどつこめ～」

依頼（前書き）

いやいや酷い目にあつた……テスト近いけど投稿！死ぬ……

## 依頼

さて、何だかんだであれから一週間。金が底尽きそうだ。なぜかつて?どつかのおしゃれさんが持つていった。てなわけで、

「ギルド行こうぜー」

金稼ぎ&レバ上げだ。1の俺はレバを上げたい。

「いいけど、何をやるの?」

うーん……やっぱゴブリンとかになるのか?

「最初は薬草採取などにや。」

うおおう、クロ知ってるのか!

「薬草?」

「そにゃ。たまに危険なやつがでてくるけど。」

それもひとつ高いランクじゃね?

「なら大丈夫かな?行こうよフィシー。」

まじか。まあゴブリンよりつかはマシか。

「そうだな。じゃ、行くか。」

到着。

取りあえず受け付けだな。

「こりひしゃいませ。今日せどのよつた御用でしょつか。」

丁寧だなあ。いだだ！コース！やめてーつねんないで！

「あ、ああ、えと、薬草などの採取はありますか？」

一応敬語をつかつておく。俺の流儀。

「お待ちください。  
ガサガサゴソゴソ。

「へりへりになります。」

薬草の採取

場所 近隣の森

危険モンスター ハシュタル

可能性 中

……危険だなあ、まあいいか。

「じゅ、これで。」

「かしこまりました。」

カードに記録する。

「お戻をつけで。」

終わるのはやい。

「んじゃ行くか。」

とゆう訳で森。

薬草は奥にあるらしい。ちなみに「シユタルはでつかい狼。ランク？Bだよ。Gのくせにありえんだる？大丈夫だ。縄張りに入つてもすぐ出れば襲われない。多分。

「それにしてもじめじめしてんな～」

「はやく帰るわよ～」

「だつたら探すにや。」「上から俺、コース、クロ。湿氣がありすぎで嫌だ。

「よし、行くぞ。」

ウオオオオオオオオオン！！！

「あ、やべ、縄張りかこ～。」

あ～じめじめしていらっしゃる。あ、ここにぶつけよ。

ウオオオオオオオオオン！！！  
近いな。

「こいよ犬つころ！！」

「ウオオオウ！」

出てきたか！

「私援護する？」

「いりん！」

「死にさらせええええええええええ！」

「ウヴォウウ！」

おせえな！ 蹴り飛ばしてやんよ！！

「ギヤウ！」

うん、すこしずつでもこうした

あ、そういうや素材買い取つて貰えるんだつけ？まあいいギルドにも  
つて行けば金貰えるだろ。

「フィシー。」

「なんぞ？」

「そいつコシユタルじゃないにや。」

「え？」

「ゴウルルルウツ！」

「そこにはアーティストの力がいる。」

まじか！なぜこそこそいるし！殺して持つてつたらビの位だらうな格  
へへへへ。

「ガウツ！！」

うわっさつきより速い！

傷つけちゃダメだしな…あ、溺れさせよう！ナイスアイディア！

「ウォン！」

あ、また蹴ったよつたく。

取りあえず、水槽！最大重量！

「ユース、やっぱ援護よろしくー水頂戴ーこの中にー！」

「分かつた！」

ふふふ…これでの犬っこを…

「ウルルルルルウ…ガウツ！」

うはww来たww

蹴り飛ばして、水槽にドーン！！

「ガババババアア……」

金ゲット！

「うしー薬草とつて帰るかー！」  
犬つころは俺が担いでいるぞ。ちなみに死んでる。

「あ、ここにこつぱーあるよ。」

「まじか。クロ持てる?」

「おkーじゃ。」

「くわえんのな。」

「ふぬや?」

「喋んなくていい。」

（金手）

「うわつなんだアレ?...」

「見ちやいけません!」

視線が痛い。

わざとギルギル。

「すいません、買取してもらえますか?」

あれ?不思議と受付の人気が怯えてるよつな…

「少しも、お待ちください。マスターと話してもいいですか……」

「これかね？」

「多分そうだよ。怖いもん。」

この犬つこひすゞく辛そうな顔してやがるし。

「お待たせ致しました！こちらへどうぞ！…あれ？さつきの人と違うな。

「どうしたの？ フィシー？」

「ん？ああ、すまない。」

あつと休んでいるんだろうな。

**依頼（後書き）**

クロは決して人化しない！！多分。

王様とギャルドマスター（前書き）

書いたの消えた…

## 王様とギャルデマスター

長いな。取りあえず一分は歩いてこる。

「まだですか？」

「やつすじですよ。…あ、いいです。」

ハハハ

「ん？ああ、来たようだな。入りなさい。」

渋くていい声だ。じゃなくて、誰かと話していたのか？

「失礼します。」

「おお、君がムータルを仕留めたのか。」「あれムータルって言つんだ。知らんかった。

「はい。それで、買い取つて欲しいのですが…」

「ん？ そうか。じゃあ田銀貨6枚どうだ？」「600万かいだろ？」

「分かりました。」

「ほれ。」

金ゲット。しばりへ暮らせるな。

「済んだか？」

ん？誰だ？このおじやん。マスターは白髪が田立つが、このおじや

んはあんまり白髪がないな。

「ん? 我のことが分からぬのか?」

え? 我つて言つくらいだし偉いんだろ? けど、誰だらうか?

「もしかして...国王様ですか?」

コースさんよくご存知で。てか、俺も知つているんだ! うん  
な風な格好ではなかつたと思つ。

「正解だ。サッシ・バル・コーリ。この国の国王だ。」

うん。なんだ、その、まんまだな。

「とひろで、このムータルを倒したお前達に頼みたい」とがある。  
うんだるうね。じゃなきゃこんなとこ来ないし。

「我の娘を救つて欲しいのだ。」

「はあ...どのように」と救つてほしいのですか?」

俺にできる範囲でな。

「病なんだが...」

なんでそうなむ...? 痘治す? ランク退治と関係ある? なーだろ  
!!

「なぜそれを私達に?」  
ナイスコース!

「フィシーと言つたか? お前の能力で何とかならぬかと思ついたの  
だが」

ああ...ギルドカードの...

「でもあります...」

「なに！？できるのか！城を抜け出しただけあつたな！」

「今からですか？」

「ああ！今すぐ行くぞ！」

指差したさきには魔方陣。  
転移魔法か？国宝級だぞ！？いや、それだけやばいのか。

「ほら、早く行ってくれー！」  
うわ、押しあがった！

「レーラーだ！」

「いや、せめて下駄だ。」

۱۵۱

「んで、娘さんはどこですか？」

「ここがか。なかなか豪勢な部屋だな。今室内に入つたら何といふか、俺の知らないいい香りがしてきた。まあこんなことはいい。

「これは…インフルエンザ?」  
いや、あの、不治ではないだろ。死ぬかも知れんけどそこまで重くないっぽいし。

「治るのか?」

「治る以前に不治じやありませんし、よく寝て、安静にしていれば対処できるでしょ?。咳き込みなによつにこれを。」  
氣休めだけどのど飴を渡してくれ。

「少しですが咳を抑えることができます。」

「おお、ありがとう…感謝する…」この礼は必ずする。  
おおまじか!くれんのかーサンキュー!

「楽しみに待つてますよ。」

何かな?金?金?鐘?やっぱ最後イラネ。

「それではまた何かあれば呼んでくださいね。」

正直娘はかわいかつた。ロングヘアのブロンドで綺麗な髪。顔も整つていて、お嬢様萌えの方は惹かれるだらうな。

「ああ。なにかあつたらまた呼ばせてくれ。」

王が言つとかね？呼ばせてくれつて。それだけ信用されてんのか  
ね。

「それでは。行くぞユース、クロ。」

「分かつた。」

また不満げな顔なさつてどつじましたか？怖いんですけど。視線が。

「こや～」

クロはなんでそうなtt…そつか。知られたらやばいもんな。

あ！薬草の依頼報告にいったのに報酬もらつてねえ！明日行こう。  
帰り道は…魔方陣でだろうな。

ふうついた。ギルド受付までまた歩くんだよな…はあ…

王様とギルドマスター（後書き）

一回消えてもう一回の氣力がなかつたので、違ひ違ひしてしまった。す  
んません。みじかくなつたのもそのせいです。

狩り（前書き）

テスト終わった…おわた…点数おわた…もう生きてけない…

狩り

受付についた。

「報酬はこちらです。」

卷之三

「連續で依頼を受けますか?」

「お願いします。」

「JRの中からお選びください。」

三  
九  
?

「すいません。なんかランクがBランク相当のモンスターしかいな  
いんですね。」

ムカデもどきのもどきもいるんじやん。 やうつかな。

「カン様達のランクがムーテルを倒したことでBになつたんですよ。

あんなのがうつて…今度は〇〇の武器のみ。とかやつてみるかな。

「一気にですか！？」

「何にするか？」

ムカデもどきもどきでもいいけど、近いところがいい。……!?

れだ！！

「ユース、これやうひ。」

俺が指摘したのはゴブリンの棲家の破壊。ばつかばつかやりたいのだよ。

「えー……」

「不満そつだな。この依頼だつたら存分に魔法放てるぞ！」  
ふふふ。これに引っかかるないとは思わない。かかるだろ。

おやおや、田を輝かせちゃって。この子の将来どうなんだろう。魔法版マッシュサイエンティストとかか？こわいこわい。

「じゃこれで。」

「承りました。」

そいじや行きますかね。

徒歩50分。長いよくな長くないような。

ようやく見つけたけど、規模は…何だこりゃ。  
数は100を超えるじゃないか…だがそれがいい…

「じゃ始めるぞ。」

「準備できたよ！」

元気いいのう。会話ではだんまりだつたのに。

「クロ～融 合！ よう。」

なに限定にすつかな。爆発させたいな……しかし……あ！

ようか。

「『それじゃレッツゴー!』」

「可寺の間」

俺が考へてゐるとモ。

馬鹿やつてないで早く終わらせるにや。

何故？

眠  
い。

神（笑）つてか？

殺すぞ？

はいはい！

גַּתְּנָהָרִים

お前らなんかフライパンで十分じゃあああああ！！！

ガツコーン！！

うん。いい音……血みどりになるナビ。

「オオオオオオ…！」

「うわあぶなあつつ

「コース…当たつてる…」

「あつつい…めつをあつつい…強くなつてない？」「なの？」「どうだつたの？」

「少しくらー我慢して！焼けない！」

「性格変わつてね？多重人格？まじか。

そつこえればおしおきの時もなんかこんな感じだつたよな…」

「「やあ…」」「

ガロン！

「「やあ…」」「

「ジヤ…！」

「「死にたい…」」「

ドチャ…！」

「ふう…いい感じ…それにしても数減らないな。100以上は軽い。

「あぶないよ…」

「んあ？」

「ウッ！」

「「『うほほ』ほ…なにすんだよ…」」「

少し焼けたつてレベルじゃねえぞ！腕一本持つていかれそうになつ

たじやねえか！！

「「めん！う、うわ！」

20匹群がつた。

ドガン！…「わあ…破片飛び散った…  
ん？爆発で飛び散る…？爆発…家庭品…ガスか。

使っていいか？

小規模なら。

分かつた。

「ユース！！離れてな！！」

ガスボンベはえっと…BBQ用を500個でいい。穴あきで。

「え？ やだよ。」

ええ？

「じゃ障壁はつてな。  
あぶないぞ～多分。

「「ボンベ…GO…！」

敵さんに 上から降らせ ガスボンベ …「まくね～五七五だぞ？  
多分。

「「マッチで着火！爆破でぬぐぬぐ…！」

DDOOOOON!!

「「ふせせーー、アーリンが、マリのようだーー。」  
超あつたけー。

少しつつたよな…？

環境破壊こそ正義なりーー！

てめ…あとで憶えてる顔こつちやん。

あ、それだけは勘弁。

勘弁ならねえ！

「せっかく魔法放して調子が出てきたのにーー何で一気にひきつけられ  
かなーー」

うわ黒い黒い黒いーー！

解除するべ。

クロもコースも厳しくないーー！？

「わざと依頼成功のためのものを集めるよ。」

「へーへー」

「クドさん、クドさん。今日帰つたら何しても良こつて。  
うわクロでめ、まじめにチクリやがつたなーー！」

「へー何でも…ねー」

何とかして逃げなれば！

「なんだその獲物を見つけた時の猛獣みたいな目は。まずは怒り度がどの位かを見ないとな。

「 そうだね。すぐそこに獲物がいるんだから。  
うわましい！これは話を変えなければ！！

「あ、あれをもつて行けば良いんじゃないかな?」

「やがて回ったよ？」

げえああああああ逃げろおおおお！何時の間に回収してんだあいつ！

「逃がさないよ」

ハツ！捕まつてゐるだと

「わ、何すN! おめN!」

あふねえ……もう少しで宿直行だつた

## 「転移魔法」テレポート

「は？」

「もう逃がさないよ。大丈夫だつて。痛くないから。」

何ここ？いや宿だけど！転移つてどんだけ高度な魔法使えるんだ？

「クロ助けて。」

「俺は悪くないにや。」

神よ。お前は普段こんななんなか。てか今どうしてんだろ。クロに

聞こい。そうだ。そうしよう。

俺、このあと干からびなつたり、燃やされたりしてなつたら神

と酒飲むんだ。未成年だけじ。

## 狩り（後書き）

なんか一人称つて難しい。てか自分のは一人称かすらよく分からないものですが。

お仕置きの内容は主に、性的に吸い取る攻撃　火責め（フイシーが受ける）

水責め（フイシーが受ける）　電気責め（フイシーお気に入り。もちろん受け）

です。

すんませんなんかソロになつてました。狩りに直しました。

## 疑問解消（前書き）

本当にすいません。何かあまりにもテストで追い詰められていたらしく、おかしタイトルになつてました。

あれ……変な幻覚が見える……神が一〇動見て爆笑している……おかしい  
な俺はさつきまで燃やされて、回復されて、燃やされてを繰り返し  
て鬼め……とか言つてたのに……取りあえず話して見るか。

「おい」

ビクツと驚いてくれたな。

「うわ……何でここにいるんだよ。死んだのか？」

「知るか……てかお前いつ復活した？」  
クロがいる時に聞いとけば良かったか

「俺は魔王死んだときに復活した。あいつの存在をあの世界の住民  
に知らせる訳にはいかないからな。その分にまわしてたのさ。」  
なるほど。

「連絡は全部寝ても入るからどれだけ寝てもいいんだが、この  
サイトが面白くてつい起きてしまうんだ。人類が考えることは面白  
いな！」

あきれた神だな。寝ても全部つて事は……

「お前仕事は？」

「あるナビゲーターのやつに頑張つてもらつてこる。

「それよつと、お前ほんとこ向ひこんのへ。  
まじでアツコウコトナ」

「ちよい待ち。今見てくる。」

「結果。幽体離脱。何故ここ来たかは分からぬ。以上！！」

「戻して。」

「ほいわつわ。」「  
やけに素直だな。

「動画見たいし。」「

急げ神め！

「つむせ……いくぞ～いいか？」

「まで！お前名前は？」

「そういうや知らんと思つて。

「俺か？そりだな……名前はダメなんだ。アマテラスとでも呼んでくれ。」

「大先輩じゃねえの？」

「同僚なんだぞ！？」

「ええ！？お前どんだけ偉いの！？」

「敬え。」

「だが断る。」

「最低な奴だな。」

「じゃ、送るぞ。ほー、つと。」

「うさあ？」

「やつと田が覚めた?少し心配したよ。」  
「どうやらあれからしおりへ経ったらしい。炎られるだけの簡単なお仕事だったからいっけど。

「焦げ臭いな…」

「あ〜」めん。調子のつて燃やしそぎたんだよ。」

死んだんじゃないのか!だからあそこに行つたんじゃないのか?

「これからはやめてくれ。あつこのは嫌いだ。」

「は〜い、気をつけます。」

「あ、これまたやるな。」

「終わったか」や? 「

クロ? いつもこいつりしないの? 。

「うん、終わったよ。」

「じゃこいつと話があるから、買い物でも行ってくれにや。また財政破綻をせぬつもりか! ?

「じゃこいつあまへす。」

「それじゃ話そつか。」

「おひ。」

「実はな、あのクソ神がまたお前に能力を預けたいそつなんだ。」

「こりね。だつて今の時点で強いもん。」

「や」なんだよ。」

?

「つまり、お前は準最強クラスなんだよ。」

「準最強クラス?」

「どうゆうひじだ? 」

「つい先日勇者が召喚されたんだ。」

「いいじゃないか勇者。かつここいぢやないか。爆発しろ。」

「最後はお前の今の顔じゃ言えないだろ。んで、どうやらあのクソ神の友人が悪ふざけでばれないよう送つたら勇者として召喚されたらしい。」

「なにか悪いことがあるのか？」

「実はその勇者、もともと邪神クラスのやつだつたんだよ。んで、召喚だとクソ神は気がつかないし、強さは邪神クラス。今のお前じや…「まつてくれ。」

「なんで勇者を召喚する必要があるのか？魔王もいないじゃないか。」

「近所の猫に聞いたが、国王の娘の病気が治り、国王が調子にのつてこのままいい感じでいこうとなり、何かあったときのために召喚をしたらしい。」

国王うぜえな…

「そんで、奴がお前では勝てない位の力、そして勇者としての力を持ち合わせている状況で、お前が勝てるわけがない。」

「そもそも、俺が戦うこと決まつてんの？」

「当たり前だ。あの勇者、お前を狙つてているかのような目をしていたぞ。」

しかし、何故戦う必要がある。俺が狙われる意味がよく分からぬ。アマテラスに直接言えよそんなこと…。」

「とゆづ詫で、何欲しい？」

「電気やら何やらの自然の力を使えるようにしてくれ。」

「……大丈夫だそうだ。使えるようになしたと。やってみる。バリリリイー！」

「OK。」

「そいじゃ特訓でもしますかね。」

コース帰つてきたら、だけど。

「コースも改造するか？」

「魔力改造でおく。」

「頼んでおく。」

「早く帰つてこないかねえ。」

「恋わすらいか？」

「ちづーよ。ある意味恋人以上だけどな。」

「違ひねえ。」

## 疑問解消（後書き）

スランプ？分からぬけど、話がうまく纏まらない。

寒い。

## 試合

「ただいま」  
やつと帰ってきたか。3時間くらいかかりてまで何してんだ?

「いや、また男に囲まれてね、困ったもんだよ。」  
何だそんなことか。気にするほどもないな。

「少しぐらー心配してくれてもこいんじゃない!?

「心配する必要ないだろ。これまで何回もあつたし。」

そつなんだよな……自分に寄つて来る男どもはぼりぼりにして、俺  
に纏わりつく女は「めんなさいしか言わなくなる位の仕打ちをして  
たんだよな……あれ? 実は守られてたのか? ……後で何かあげようか  
ね。

「何くれるの!?

「はや! ……ってか何故分かつた!?

顔か? 顔なのか!? それとも……

「ふつふつふ……魔法だよ……」

うわ~ やつぱりだよ~ 予想ビリツだよ~  
てかそんなことよつも!~

「試合じゆべつせー!~

「こきなりだね……」  
いや、早く使いたいし。

「磯野、試合やうにせよ」

「いやちでよ通じなこりや。」  
「いこな~四回せつ」…

「イソノ? ナカジマ? 誰?」

あ  
何が黒いのがあるな(知りないな)

いいからさつと行ってこにや。

卷之三

「…どうだ？」

九月廿二日

「おお、  
来たか。」

あの姿は！！

「アマテラス！？」

「ん？ ああ、そうか。そう言つたんだっけ。」

「フィシーこの人がイソノ？それともナカジマ？」  
まだ引きずつてゐる…てかアマテラスつて言つただろう。

「初めまして。アマテラスと言つ者だ。」

「アマテラス?」

爆弾投下すんなよ……？

「か?」「さへやつたと試合すつか!……」

さつそくですよ……コースは脳内処理が追いつかなくなると軽く壊れ氣味になるからやめて欲しいのに……昔それで腕折ったのに……痛かったのに……！

「カム? なにそれ?」

「なんでもないからやるぞ……」

「その前に、俺の用件を済ませさせてくれ。」

「なんだ?」

「お前が頼んだものだ。」

ん? ああ、あれか。魔力改造か。

「それ。使えるからやってみ。」

「え? は、はい。」

ボガアーン!!

「ユース。それって?」

俺が知らないはずないんだがこんな威力の詠唱なしあつたっけ?

「嘘……これ詠唱なしなのに……」

「あ、やべ、改造つてレベルじゃない。」

「アマテラスお前何した！？」

「うーん。魔力だけじゃなく、攻撃力 자체もがつたり上げてしまつた…てへべる。」

な・に・が・て・へ・べ・ろ・だ・！・！・男・が・や・つ・て・も・可・愛・く・な・い・ぞ・！・！

「そつちー？」「

「別に俺は困らないもん。」

「そ、そつか。」

「ユース～やるひぜ～」

「え？ わ、分かつた… あの人何者なの？」

「すごい人。」

「そ、そつ…」

「そいじゅこぐで。…は…！」

取りあえず電撃！

「ファイヤーボール！」

ちょーボールで潰すとか…凹むな

「じゃあこれだ！！」

氷柱で「ざわ」。語尾は特に意味なし。

「ファイヤーボール！！」

れつきより強い！！てかこっち来た！！避け！！

「あつぶね～！軽く火傷しちまつたな！」

能力と繋げてみるか？できるか？

「まだだよ！！」

うわもう一個…！」うなつたら！！

「食らえ！超電〇砲！！」

某ビリビリ中学生からの借り物だがどうだ！？

ボフン！

見事！貫いた！！

ドガン！

「ーー？」

やべ…やりすぎた…

「大丈夫かー？」

「危ない……障壁張つて良かつた……」  
防ぎやがつた！どうゆうことだ！？」

「ふふん。全魔法対応済みだもん。簡単には破らせなによ。」  
魔法じやないんだがな」

「ならこれならどうだ！？」「

感電防止用の手袋をつけて……

「エレキボール！！」

媒体は純鉄。電圧？想像に任せよ。何故ならもう一個打つからだ。  
2個目はスタンガンほどの威力。

バキン！

障壁は壊れた。あとは……

バチ！

作戦じうつ。

「うう？」

氣絶しました。そいじゃ起きるまで待ちますかね。

試合（後書き）

寒いです。餅は好きだけど寒いのは嫌いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1890z/>

---

どうやら俺は転生できるらしい。

2012年1月12日19時45分発行